

創作活動を通じた和声とテクスチュアの学習

加納暁子*1、力田和歌子*2、三上次郎*3

*1 教育学研究科 *2 附属中学校 *3 教育学部

1. はじめに

中学校音楽科において教員が授業を行い辛いと思う点は、生徒の音楽能力や読譜力にあまりにも差があるということではないだろうか。小学校の学習指導要領では第1学年及び第2学年では「範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること。」(歌唱ア)、第3学年及び第4学年では「範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌うこと。」(歌唱ア)、第5学年及び第6学年では「範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと。」(歌唱ア)となっている。また共通事項においては「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。」とされており、全音符から16分音符、付点、ト音記号、ヘ音記号、#やbなどの臨時記号、拍子記号、強弱記号などにわたり指導要領に示されている。しかし、現状では音楽の専科教員がいる学校、個人的にピアノ等の習い事を経験している子どもたちは楽譜が理解できるが、音楽の苦手な先生に巡り合った子どもたちは学習指導要領に記載されている指導事項を学習出来ておらず、中学校に入学しても結局音楽は分からない、つまらない、そして苦手教科となってしまう、授業を困難なものにしている。ただ、楽譜を知識として教え込んで苦痛を伴う活動となってしまうては本末転倒である。そこで、実際の音楽活動を通して音楽の構造や仕組みを学び、将来の表現活動に発展させることが出来るような学習となることをねらいとした研究を行った。

2. 研究授業の概要

楽譜の読み書きを行いながら、和声やテクスチュア¹⁾を学び、音楽科の歌唱、器楽、鑑賞活動全般において活かせる音楽能力を高められるような研究授業を、創作の分野を中心として設定した。具体的には二部形式で単旋律の曲を作り、そのメロディーに合う和声をあてはめていく。また、二部形式の **B**: b の部分でメロディーに合うオブリガートを作り、主旋律とオブリガートの関係性からテクスチュアを学習していく。研究授業の概要は以下に示すとおりである。

題材名：君も作曲家の卵！～オリジナルの小品をつくろう！～

題材の目標

- 主要三和音を理解して、和声をつけたり、旋律をつくったりすることができる。
- 自己のイメージと音楽を形づくっている要素とを関わらせながら、まとまりの

ある小品をつくることができる。

学年：中学1年

評価規準

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
主要三和音を理解して和声をつける学習に主体的に取り組もうとしている。【関－①】 旋律に和声をつけたり、オブリガートをつくったりすることに興味を持ち、意欲的に創作の授業に取り組んだりしている。【関－②】	自分たちの作品に、音楽を形づくっている要素をどのように取り入れたり、変化させたりするかについて思いや意図を持っている。【創】	主要三和音を理解して和声をつけることができる。【技－①】 主要三和音の構成音を用いてオブリガートをつくることができる。【技－②】	

学習活動と評価の計画

◎二部形式のオリジナルの小品をつくろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・10時間

学習活動	教師の関わり	評価の観点				時間
		関	創	技	鑑	
○主要三和音を理解し、既習曲「主人は冷たい土の中に」に和声をつける。	主要三和音の構成音と響きをつかませ、三和音もしくは根音を用いて、旋律に伴奏をつけさせる。	①				1
○「浜辺の歌」を歌唱し、フレーズと曲の構成を理解して和声をつける。	小楽節、大楽節、二部形式及びへ長調における主要三和音を理解させ、三和音もしくは根音を用いて、旋律に伴奏をつけさせる。			①		1
○ペアでつくった二部形式の旋律に和声をつける。	ペアになって7月に作成・記譜をして完成させたオリジナルの旋律に、主要三和音を用いて伴奏をつけさせる。			①		1
○ペアでつくった二部形式の旋律にオブリガートをつける。	既習曲を用いて、オブリガートのリズムや音の動きについて学習した後、リズム創作を行い、主要三和音の構成音を用いて音をつけさせ、オブリガートを完成させる。	②		②		4
○中間発表会を行う。	3ペアが一つの班になり、それぞれの主旋律とオブリガートを聴き合う。できたところまでを発表し合い、作品をより良くするための工夫や改善点に気づかせる。		○			1
○ペアで作ったオブリガートを再考し、作品を完成させる。	前時のアドバイスを生かし、リズムや旋律の動き、曲の盛り上がりなどに着目して、オブリガートや作品全体を再考させる。		○			1

○発表会を行い、互いの完成作品を聴き合う。	作品をより良くするための音楽的な工夫に気づかせながら、相互評価させる。		○			1
-----------------------	-------------------------------------	--	---	--	--	---

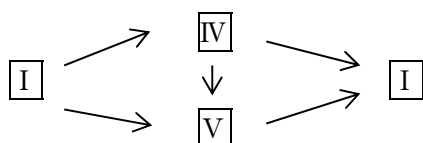
3. 授業分析

【第1時】

ハ長調の主要三和音（Ⅰ：ドミソ、Ⅳ：ファラド、Ⅴ：ソシレ）について説明を行う。その後、3人1組になって、キーボードでⅠ、Ⅳ、Ⅴの和音を演奏する。この活動ではピアノ等を個人的に習っている学生は苦もなく弾けるので、分からない友達に教えており、協働的な学習が展開されていた。また既習曲「主人は冷たい土の中に」のメロディーにⅠ、Ⅳ、Ⅴの和音で適合するものを選んで発表し合った。この時点では、メロディーと和音が合致していると納得している様子であるが、合致せず不協和音が生じると反応して笑っている状況であった。メロディーとハーモニーの一致について感覚的に捉えられている段階である。

【第2時】

前時の「主人は冷たい土の中に」に付けた主要三和音を見直し、それぞれの和音進行の規則性について気づかせる。和声進行は以下のような図で表せる。



Ⅰ→Ⅳ→Ⅰ、Ⅰ→Ⅴ→Ⅰ、Ⅰ→Ⅳ→Ⅴ→Ⅰの進行はあるが、Ⅰ→Ⅴ→Ⅳ→Ⅰの進行はない。また、生徒はフレーズが終わるときはⅠ、終わりそうときはⅤになっていると発言しており、曲の継続感、終止感を感じ取っているといえる。

その後、「浜辺の歌」の歌唱と、「浜辺の歌」における和声進行の確認を行った。「浜辺の歌」はハ長調になるため、Ⅰはファラド、Ⅳは♭シレファ、Ⅴはドミソになる。また、学習指導要領の「内容の取扱いと指導上の配慮事項」に定められている「移動ド唱法」を試みた。第2時は応用であるが、今後の音楽学習の礎となっていく活動である。

【第3時】

3時間目では再び調性をハ長調に戻し、主要三和音の定着を図る。「主人は冷たい土の中に」を階名で歌いながら、キーボードで三和音を演奏する活動を行った。また「ハローハロー」（発声練習）を歌いながら、Ⅰの和音の音の役割について考えた。その結果、根音は「まっすぐ」や「支える感じ」、第5音は「（腕を斜め上に上げて）あさってに向かっている感じ」、第3音は意見が出にくかったが「教頭先生のような役割」や「溶かす感じ」といった意見がでた。第3音のミは、根音

と第5音に挟まれて間を取り持つイメージが浮かんだと思われる。その後、各自が作ったオリジナルの旋律に主要三和音を当てはめる活動を行った。授業の最後の感想では特にⅣ（ファラド）の和音は広がっていく感じがするという意見が出た。

（オリジナルの旋律は2016年7月に二人一組で創作した。 $\boxed{A}: a \rightarrow a' \rightarrow \boxed{B}: b \rightarrow a'$ の二部形式の作品で、 $A-a$ はドレミファソを用い、開始音はドミソ、 $A-a'$ はドレミファソ、 $B-b$ はドレミファソラシまで使用でき、 $B-a'$ は $A-a'$ と同じという決まり事を設定した。最初にリズムを決めて、音をあてはめて旋律を作っていく）

【第4時】

前時ではオリジナルの旋律に主要三和音をあてはめたが、この段階から更に曲を膨らませていくことを目的として、オブリガートを作る活動に入る。しかし、急には作ることは出来ないなので、予備活動としてまず小学校4年生の教科書から「せんりつづくり」という単元を用いて学習をする。この活動では、 $I \rightarrow V_7 \rightarrow I$ 、 $II \rightarrow V_7 \rightarrow I$ というように旋律が作られることが設定されているが、 I （ミソド） $\rightarrow V_7$ （ファソシ） $\rightarrow I$ （ミド）、 II （ファラレ） $\rightarrow V_7$ （ファソレ） $\rightarrow I$ （ミソド）と、あらかじめ音名が選択肢として挙げられており、この選択肢から音を選ぶと、まとまった旋律になる。

その後、小学校2年生の教材「こぐまの2月」と4年生の教材「パフ」を用いて、歌唱活動を行う。両教材とも簡単なオブリガートが付いている。そして、主旋律とオブリガートの関係性や規則性に気づかせる。その結果、「こぐまの2月」では主旋律とオブリガートが対称になっている、「パフ」では「どちらかが伸ばしているときに、どちらかが動いている」といった意見が出た。

（主旋律とオブリガートが対称とは、主旋律がソファミと下行しているとき、オブリガートはミファソと上行して上下対称になっていることをいう。）

【第5時】

第4時と本時の間に年末年始の休暇があったため、復習を丁寧に行う。まず第2時で学習した和声の進行表について確認する。そして「主人は冷たい土の中に」にオブリガートが付いているため、オブリガートに階名をふる。そして階名を唱えながらリズムを手拍子で打つ。この活動は読譜の練習を兼ねている。さらに2人ペアになって、主旋律、オブリガートのリズム打ちを行い、気づいたことを付箋に書く。また「パフ」についても同様の活動を行う。気づいたことを記入した付箋は画用紙に貼り、クラスの意見として一覧できるようにする。

【第6時】

オリジナルの旋律にオブリガートを付けていくが、まずはオブリガートのリズ

ムのみを作る。また「こぐまの2月」についても主旋律とオブリガートの関係性で気づいたことを付箋に書く。

【第7時】

本時ではオブリガートに音を付けていく。「こぐまの2月」や「パフ」を歌い、前時に付箋に記入したことを集約したものを確認していく。オブリガートの特徴として挙げられた意見は以下のとおりである。

旋律の気付き	リズムの気付き
主旋律の音が高くなる（上行）とき、オブリガートの音は下がる（下行）。	主旋律がせわしく動いている時、オブリガートはゆっくり動いている。
主旋律の音が下がる（下行）とき、オブリガートの音は上がる（上行）。	
主旋律の音が高いときは、オブリガートが低い。	
オブリガートの音が低いときは主旋律が高い。	
主旋律、オブリガートともに旋律に和音の構成音が含まれている。	

「旋律の気付き」の2番目は「パフ」から気づいたことで、主旋律よりオブリガートの方が、音が高いところがあるという意味である。この気付きをもとに、二人一組でオリジナルの旋律にオブリガートを付けていく。授業終了前に紹介された作品は以下のようなものである。

譜例1（F君、Hさんの作品）



クラスからは「ハモっている！」などどよめきの声があがった。「どうして上手いのか？」と教師が問い、考えさせると「旋律の気付き」の1項目目である、旋律の逆行が用いられているという意見があがった（1，2小節目）。このペアは4小節目でオブリガートがソに入るか、ドに入るかで迷っていた。クラスにも意見を求めると「ソは続く感じ、ドはまとまる感じ」という意見が得られた。（最終的にはソに決定した。）

【第8時】

「中間発表」を行う。これまで二人一組のペアで活動を行ってきたが、3つの

ペア（6人）で、お互いのペアの作品を聴き合い、気づいたこと等をアドバイスする。授業の冒頭で主旋律とオブリガートの関係性に気づいたことを再確認するが、別のクラスの気付きも加えて、前時より気付きが充実してきている。

旋律の気付き	リズムの気付き
主旋律の音が高くなる（上行）とき、オブリガートの音は下がる（下行）。 主旋律の音が下がる（下行）とき、オブリガートの音は上がる（上行）。	主旋律がせわしく動いている時、オブリガートはゆっくり動いている。
主旋律の音が高いときは、オブリガートが低い。 オブリガートの音が低いときは主旋律が高い。	主旋律の音が伸びている所や休符の所にオブリガートがリズムを打っている。
主旋律、オブリガートともに旋律に和音の構成音が含まれている。	主旋律とオブリガートが重なっている部分は和音になっている。
主旋律とオブリガートの音程の差3度。	
隣同士の音は重ならない。	

「中間発表」で大半のグループは和音の構成音に基づいてオブリガートを修正しており、和音の構成音ではない不協和音が長い時間ぶつかっていると違和感が出るという結論に至った。

【第9時】

本時は前時の中間発表で友達から得られた意見をもとにオブリガートを再考していく。本時の目標は「主旋律を引き立たせるオブリガートに仕上げよう」とする。毎時間、定着タイムとして「ハローハロー」の発声、三和音の各音の役割、和声進行、主旋律とオブリガートにおける旋律の気付きとリズムの気付きに関して喚起させ、生徒たちは即答できるようになっている。30分以上の練り直しの活動を経て、以下のような作品が出来上がった。

譜例2（K君とSさんの作品）



上記の部分を初めてクラスで披露した際、「オーッ！」という歓声があがり、「推進力がある」という意見が出た。その後、3小節目が目立ちすぎているのではという意見も出たが、「わくわくする感じ」を変えたくないというペアの意思があり、

変更せずにこのままで仕上げた。8分休符を入れながら裏拍に音を入れることによって、音楽の構造と「わくわくする感じ」という生徒の想いがつながった作品となった。また、クラスからも、「主旋律を引き立てている旋律になっている」という意見が出た。

【第10時】

本時は「二部形式のオリジナルの小品を作ろう」の最終にあたり、各グループが作品を発表し合った。上記のK君とSさんによる作品は全体として以下のようなになった。

譜例3 (K君とSさんの作品)

The musical score consists of three systems, each with two staves. The first system shows a melody in the upper staff and rests in the lower staff. The second system includes a fermata over the first measure of the upper staff and a double bar line at the end. The third system features a fermata over the first measure of the upper staff, a 'D.S.' marking at the end of the upper staff, and a 'D.S.' marking at the end of the lower staff.

全10時間の学習を経て、生徒は以下のような感想を記した。

僕は今回、音楽をつくる難しさを感じました。音のつながり方が変になったり、リズムが崩れたりとなかなかうまくいきませんでした。そこで、音のつながり方をもっとなめらかにするために、隣り合っている音を1音上げたり、下げたりすると、曲ができました。オブリガートの2小節目のところは広がる感じにするか、3小節目につながる感じにするか悩みましたが、友達のアドバイスでもっと広がる感じが出したかったので、旋律が上行するとき、オブリガートを下行させました。こんなことをペアで考えるのは難しかったですが、とても楽しかったです。

私は今回、曲をつくることを通して、難しさや深さを学びました。2部形式の旋律を引き立たせるためにたくさんの工夫を学びました。音楽を形作っている要素を一つ一つ確認しながら、和声とオブリガートをつけました。それぞれの中には、きまりや音楽をよく美しくさせるためのパターンや型がたくさんありました。楽譜上では横に流れる曲ですが、一つ一つの音に注目する「縦の観点」も必要になっていました。考えようによっては、音楽は無限大に広がり、雰囲気も十曲十色ですごく深いと思いました。とても楽しかったです。

生徒は曲をつくることに難しさは感じながらも、広がる感じを出す（雰囲気の影響）ために、旋律を上行させ、オブリガートを下行させる（要素の知覚）方法を取り入れたり、曲の横の流れの中に「縦の観点」を取り入れ「テクスチュア」を活動を通して学習したことが分かる。

4. まとめ

本授業を通して、まず生徒は「I」「IV」「V」の和音の種類、和声進行の原則を毎時間確認することによって、暗唱できるほど覚えられていた。また各和音の役割についても理解できていた。また、主旋律とオブリガートの関係性に関わる「旋律の気付き」と「リズムの気付き」も実際の楽曲である「パフ」「こぐまの2月」「ぷっかりくじら」を通して見出し、且つ自らの作品においてオブリガートを付ける際にもこれらの気付きを活かそうとしていた。

また、生徒の学習過程を振り返ると、まずどのグループも旋律に和音の構成音が含まれているかを確認し、不協和音が響かないようにしていた。そして中間発表など他者の意見を参考にしながら、すべてのグループとまではいなくても、K君とSさんのペアのように、イメージと音楽の構成がリンクされた作品に仕上げられたグループもあった。これは指導要領における「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること」を、創作活動を通して学び、作品として表現することができたといえる。

本授業の基礎的な学習事項である記譜や読譜についても、期末試験では好成績であった。記譜や読譜が知識としてではなく、活動を通して身に付けられたこと、そしてペアを組んで活動したことにより、読譜が得意な生徒が苦手な生徒を助けるという協働的な学びが見られた。そしてこの学習を通して、指導要領において音楽科において指導されるべき「共通事項」のうちの「和声」「テクスチュア」（音が垂直的、水平的に関わることによって生まれる音の織り成す状態）を主に学ぶことが出来た。

以上のような学習は、今後生徒が表現や鑑賞の授業において、楽曲を分析し理解や表現を深めるための礎となり、今後の発展、応用が期待されるといえる。

注

- 1) 中学校学習指導要領解説「音楽編」(文部科学省、平成 20 年)において、「テクスチャ」とは「音と音とが同じ時間軸上で垂直的にかかわったり、時間の流れの中で水平的にかかわったりして、織物の縦糸と横糸のような様相で様々な音の織り成す状態が生まれる」(p.19)と定義されている。